

## 査読付き研究ノート

# 性的マイノリティに対する総理解の 影響要因および交互作用分析 ～ LGBTセミナーを受講した大学生を対象として～

閻 亜 光\*

## 要 旨

本研究は大学生の性的マイノリティ当事者への総理解に着目し、性的マイノリティ総理解に、当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持といった2つの要因の影響があるかを検討し、その後、要因間の交互作用の有無を明らかにした。日本のA大学で大学生向けのLGBTセミナーを任意受講形式で行い、受講した学生の同意の上、実施したアンケートを本研究のデータとして使用した。アンケートは合計12項目で構成されており、最終的に224名の有効サンプル数が得られた。セミナー後性的マイノリティ当事者への総理解度に影響を与える要因分析をするため、仮説1a「当事者と関わる不安度は、性的マイノリティに対する総理解度に負の影響を与える」と仮説1b「カミングアウトできる環境の支持は、性的マイノリティに対する総理解度に負の影響を与える」を立て分析を行った。結果として「当事者と関わる不安度」は、統計上に有意な負の影響が見られ、仮説1aは支持された。「カミングアウトできる環境の支持」による負の影響もみられたが、統計上に有意ではなかったため、仮説1bは棄却された。また、仮説2「当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持の交互作用はあり、性的マイノリティに対する総理解度に正の調整効果がある」を用いて、性的マイノリティに対する総理解度に「当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」の変数間の交互作用を分析した。その結果、「当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」の交互作用は正の影響があると明らかになった。分析結果に基づき、性的マイノリティの総理解において、当事者と接する際の不安をいかに消せるか、カミングアウトをいかに扱うかは重要な側面だと新たな発見として得られた。また、オンライン形式のセミナーが主流になった現在、LGBTセミナーを実施するにあたって今後の注意点を示し、オンライン形式でのLGBTセミナーは対面セミナーと効果的に異なるか、LGBTセミナーは大学生の学級による違いが存在するかといった研究課題が残されている。

キーワード：LGBTセミナー、性的マイノリティ、カミングアウト、交互作用

1. はじめに
2. 性的マイノリティとは
3. 先行研究と仮説提示
4. 研究方法
  - 4.1. データの取得
  - 4.2. 被説明変数
  - 4.3. 説明変数
  - 4.4. 統制変数
  - 4.5. 分析モデル
5. 分析結果
6. 結果考察
  - 6.1. 不安度は如何に解消できるか
  - 6.2. カミングアウトの捉え方
7. 本研究の限界
8. おわりに

---

\* 立命館大学院経営学研究所 博士課程後期課程 2回生

## 1. はじめに

性的マイノリティ当事者の代表である LGBT に関する認識は徐々に世間に広まりつつある。葛西・小渡 (2018) は、2015 年東京渋谷区での同性パートナーシップ制度の開始により、社会が全体的に LGBT を含む性的マイノリティに対する関心が高まったと述べた。行政のみならず、企業での取り組みも近年見られるようになった。閻 (2021) によると、LGBT に対する先進的な取り組みを行う企業を調査した結果、「徹底した支援宣言」、「自主的な教育」、「他のステークホルダーとの協力」といった共通取り組みが発見された。多くの企業は LGBT を含む性的マイノリティ当事者に働きやすい環境を提供しようとしていることが窺える。一方、教育の現場では、性的マイノリティの実態はどのようになっているかをまとめてみた。小畑ら (2022) は、大学の性的マイノリティに関する問題点を分析した際に、ほとんどの大学生が高校まで性的マイノリティに関する勉強する機会はなく、大学に入学後、性的マイノリティに関する教育もあまり受けられていないと指摘した。大学生になるまで、自己アイデンティティと価値観が培われていないかと懸念され、性的マイノリティに関する教育も十分に行き渡っていないと考えられる。宇田・五位塚 (2022) によると、現在の大学教育現場で性の多様性を情報として提供する場面は極めて少なく、仮に情報があるとしても適切な情報とは限らないため、性的マイノリティ当事者は自身に関する知識を独自で勉強せざるを得ない状況に陥っていると明らかになった。したがって、大学生の性的マイノリティに対する知識を増やす必要があり、有効な手段としてセミナーなどといった教育方法が予想される。宮腰 (2020) は、近年一橋大学において「臨床」、「研究」、「教育啓発」といった三つのカテゴリーで、性的マイノリティにまつわる変化が見られ、特に「教育啓発」においては、2010 年度から定期的な研修機会が学内で設けられるようになったと大きな変化があると述べた。また、松井 (2021) は、性的マイノリティに関する学校の支援制度を調べ、関連授業やワークショップ、アライ<sup>1)</sup>を育成するといった取り組みが学校で行われていることを発見し、当事者のみならず関わる人達や一般の学生も対象とした多くの活動が行われていることを明らかにした。性的マイノリティに対する意識改善の方法としてセミナーのような研修がよく用いられることが示唆される。

中山 (2021) は、大学生が性的マイノリティに関する認知調査を行った結果、調査された 9 割の学生は LGBT という言葉を知っていたが、性的マイノリティに対する偏見が解消されていないことを述べた。また、研修後性的マイノリティに対する総合理解に影響する要因を特定する研究はほとんど見当たらない。金 (2022) によると、性的マイノリティの周りが示す不安や不適切な言動は、当事者に大きなダメージを与えることが明らかになった。と同時に、性的マイノリティ当事者が示す孤独感や回避的な態度などにより、周りの人たちが性的マイノリティへの認知は変わると考えられる。さらに、性的マイノリティを認知するには、性的マイノリティ当事者のカミングアウトをどのように捉えているかも影響すると考えられる。カミング

アウトとは、公表していない自らの出生や病状、性的指向等を表明することであるが、本研究において、性的マイノリティ当事者が自分の性的指向や性自認等を公開することを指す。四元・千羽 (2017) は、カミングアウトしてもすっきりしない、戸惑ったりする当事者が存在し、また、好奇心な目で見られ、対人恐怖に襲われる可能性があり、カミングアウトができない当事者は多いと指摘した。そして、教育がしっかりされていない環境の中で、大学生は性的マイノリティを正しく認知できるかが懸念される。したがって、カミングアウトに対する態度は、性的マイノリティ当事者に対する総合理解に影響を与えると考えられる。本研究は、セミナーを通して不安度を低下させる及びカミングアウトできる環境を支持させるようなコンテンツを提供することで、受講生の性的マイノリティに対する総合理解度との関連性を明らかにする。

また、日本の大学では性的マイノリティに関する教育としては、出張授業やセミナーなどの取り組みが実施されている。吉澤ら (2021) は、LGBT に対する理解に関する研究をした結果、LGBT 当事者の出張授業を受けた学生は受けていない学生に比べ、LGBT 支援団体や差別用語の区別について理解度が高かったと明らかにした。吉岡・坂谷 (2017) によると、性的マイノリティに関する知識量が多い学生と少ない学生と比較し、知識量が多い学生は性的マイノリティに関する知識を実践の利用価値として考えていることが明らかになった。すなわち、知識量が多い学生であるほど、教育における性的マイノリティへの支援の重要性を認識していると考えられる。しかし、上述したように性的マイノリティの支援を含め、教育を受けた後の学生は性的マイノリティに対する総合理解がどのようになっているかが明らかになっていない。したがって本研究は、日本の大学において、性的マイノリティを代表する LGBT に関するセミナーを行い、受講後の学生の性的マイノリティに対する総合理解度に当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持といった影響要因が存在するかを検討する。その上、性的マイノリティの全体認識に当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持の交互作用があるかを明らかにすることも目的とする。

## 2. 性的マイノリティとは

性的マイノリティはセクシュアルマイノリティの日本語訳であり、小畑ら (2022) によると、セクシュアルマイノリティ<sup>2)</sup>とは、心と身体の性別が一致している異性愛者以外のセクシュアリティを有する者であると定義した。その中、LGBT が代表する性的マイノリティという認識が徐々に広まっている。四元・千羽 (2017) は、LGBT とは、レズビアン (女性の同性愛者)、ゲイ (男性の同性愛者)、バイセクシュアル (両性愛者)、トランスジェンダー (生物的性と自覚的性の不一致者、性同一性障害者を含む) の四つの頭文字を使った造語だと述べた。法務省<sup>3)</sup>によると、Lesbian (レズビアン) とは、心の性が女性で恋愛対象も女性であり、女性の同性愛者のことを指す。Gay (ゲイ) とは、心の性が男性で恋愛対象も男性であり、男

性の同性愛者のことを指す。Bisexual (バイセクシャル) とは、恋愛対象が女性にも男性にもなる人であり、両性愛者のこと指す。Transgender (トランスジェンダー) とは、身体の性と心の性が一致していない人を指す。LGBT は一つの概念のように認識されようになってきているが、LGBT は性的マイノリティの全てだと勘違いされやすい。性的マイノリティの中に全性愛者 (Pansexual) もしくは無性愛者 (Asexual) のようなマイノリティの人もいる。中山 (2021) は、性的マイノリティ当事者の性自認と性的指向は LGBT だけではなく、自分自身の性的指向は定かではないクエスチョニング (Questioning) という当事者や男性でも女性でもない性別である X-ジェンダー (X-gender) という性自認をしている当事者もいると指摘した。また、近年 LGBT のような造語は、差別的な意味合いが含まれると指摘されやすいため、「SOGI」という造語が新しく出てきている。「SOGI」は、Sexual Orientation & Gender Identity という英語の略語であり、日本語に変換すると、性的指向と性同一性 (性自認) のことを指す。

### 3. 先行研究と仮説提示

羽田野ら (2019) は、学生時代でいたずらを経験した多くの人は LGBT 関連のものがあったにもかかわらず、「性同一性障害」と「同性愛」の違いとは何かを説明できないことが多いと指摘した。学校という組織内で性的マイノリティ当事者が笑われる対象になる可能性があるため、大学にて LGBT の学生に対するカウンセリングを実施した実績を分析し、当事者を個別に対応すると同時に、大学環境の改善を始め、当事者学生が過ごしやすい環境を作るべきだと河野 (2018) が指摘した。そのため、本研究は大学生に焦点を当て、大学生の性的マイノリティに対する総合理解度に影響する要因を分析することにした。

大学内で性的マイノリティに対して、学生がどのように認識しているか、どのよう理解しているかは、性的マイノリティの当事者への正しい認知へと導く重要な側面だと考えられる。南 (2021) は、学内で性的マイノリティを代表する LGBT に対する認識について調査した結果、ほとんどの学生は LGBT 当事者が普通な存在だと捉え、さらに理解したいという意欲を見せしていると明らかにした。しかし、性的マイノリティへの総合理解にどのような影響要因があるかの検討はなされていなかった。その上、性的マイノリティ当事者との関わりに関する研究は極めて少ない。その背景原因として、当事者がカミングアウトしない限り、当事者であることを認識できないということが考えられる。

一方、釜野ら (2016) は、身近の性的マイノリティとの関係が近いほど嫌悪感を示す傾向があると指摘した。また、日本の性的マイノリティ当事者が行うカミングアウトは、日本の社会文化的構成のジェンダー的影響により、父親へのカミングアウトが母親へのカミングアウトより困難だと Tamagawa (2018) が明らかにした。当事者と接する際、距離を置きたいといった嫌悪感や不安により、性的マイノリティ当事者への理解が低下する可能性が考えられる。また、Sharek et al. (2015) は、アイルランドの医療従事者の性的マイノリティのカミングアウト

に関する調査をした結果、性的マイノリティ当事者はカミングアウトしたことで多くのポジティブな出会いが得られた一方、約3人に1人は否定な態度を恐れてカミングアウトしないことを選んでいることがわかった。カミングアウトされる側が示す嫌悪、不安、恐怖な態度などといった否定的な反応により、性的マイノリティ当事者のカミングアウトを阻止したとも考えられる。また、服部(2021)によると、トランスジェンダーとの関わりを不安に思う企業は、当事者の採用を見送る恐れがあると指摘した。当事者と接する不安が高まると、当事者から遠ざかり、性的マイノリティの総理解が下がると予想される。そのため、性的マイノリティと関わる際に不安に思うほど、性的マイノリティに関する正しい総理解がより得にくい状況に陥ると示唆できる。

一方、日本企業という職場でのカミングアウトする意欲に関して、当事者は非当事者の考えるほどカミングアウト意欲が高くなかったことを閻(2021)は明らかにした。田中・今城(2021)によると、カミングアウトには、単なる自分の属性を他人に説明するだけの意味ではなく、話してはならないこと、隠したほうがいいとされていることを「自白と懺悔」という含意もあり、カミングアウト遂行能力は人間関係親密希望と正の関係があると述べられた。換言すると、性的マイノリティ当事者は他人に秘密を伝え、カミングアウトという行為はありのままの自分を知ってもらい、より良い人間関係を築きたいという側面が大きいと考えられる。性的マイノリティ当事者が信頼できる、親しくなりたい相手にのみカミングアウトするという解釈もできる。それにより、カミングアウトを支持するか否かは性的マイノリティの総理解に影響すると考えられる。同じく閻(2021)は職場でのカミングアウト意欲に対して、LGBT当事者と非当事者に調査し、当事者より非当事者が考えている「当事者のカミングアウトが必要である」の数値が統計上に有意に高かったことを明らかにした。したがって、カミングアウトをポジティブに考える傾向があれば、LGBT当事者の実態と乖離してしまうと予想できる。また、本研究は職場での取り組みを扱っているため、学校という職場で、学生がカミングアウトできる環境を支持すればするほど、LGBTを含めた性的マイノリティ当事者を正しく認知する可能性が下がると考えられる。

以上のことを踏まえて、当事者と関わる際に、示す不安が多ければ、当事者への総理解度は下がると予想される。また、カミングアウトできる環境を支持するほど、性的マイノリティに対する総理解度も下がると考えられる。先行研究を踏まえて、以下の仮説を設ける。

仮説 1a: 「当事者と関わる不安度は、性的マイノリティに対する総理解度に負の影響を与える」

仮説 1b: 「カミングアウトできる環境の支持は、性的マイノリティに対する総理解度に負の影響を与える」

当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持は、性的マイノリティに対する総理解度にそれぞれの負の影響を与えると仮説 1a と仮説 1b にて説明したが、この二つの独立変数の交互作用で考えた場合、どのような影響があるかに疑問を抱く。鈴木・池上(2020)に

よると、性別自尊心の高い異性愛者の男女は、友人がカミングアウトした後、同性愛者全般に対する態度をポジティブに変化させることが明らかとなった。この結果に基づき、周りに存在する性的マイノリティ当事者がカミングアウトすることにより、性的マイノリティ当事者に対する態度がポジティブに転換し、不安が高まっている一方、性的マイノリティの当事者のことを知ろうとすることも考えられる。また、性的マイノリティ当事者がカミングアウトの過程において、幸福度のレベルが低下するものの、性的アイデンティティに関する認識が増えたと Pastrana. (2015) の研究にて明らかになった。換言すれば、当事者と関わる不安度が高い状態で、カミングアウトされると、性的マイノリティ当事者が表す性的アイデンティティにより、性的マイノリティ当事者に関する認知が増えると予想できる。当事者への不安度とカミングアウトできる環境の支持といった交互作用があると考えられる。したがって、仮説2は以下となる。

仮説2:「当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持の交互作用はあり、性的マイノリティに対する総合理解度に正の調整効果がある」

## 4. 研究方法

### 4.1. データの取得

上述した仮説を検証するため、階層的重回帰分析および交互作用といった分析方法をもいることにした。統計処理においては、IBM SPSS Statistics のバージョン 28.0.1 と R 言語 4.1.3 を使用した。本研究は使用したデータは、日本の関西地区にある私立 A 大学の学生に向け、「LGBT セミナー」といった学内セミナーを開催した後、学生が任意参加の元で取得したデータである。学生の中、性的マイノリティに関する知識を全く持っていない学生がいると考えられるため、性的マイノリティの知識の増加に正の効果がある (Matza, et al. 2015, Kull, et al. 2017, Cooper, et al. 2018) 「LGBT セミナー」を用いて、セミナー後のアンケートを最終データとした。本研究は、合計 12 項目のアンケートを用いて統計データを得ることにした。セミナーのアンケートはオリジナルのものだが、被説明変数である「性的マイノリティに対する総合理解度」に「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」といった説明変数がそれぞれ与える影響の有無を検証するため、吉本 (2022) が実施した大学生と教職員向けの「性のあり方の多様性に関する意識調査」の調査項目を用いることにした。その上、電通 (2021) が行った「LGBTQ + 調査 2020」の中に学校教育や当事者が所属する環境が言及されたため、そのアンケート項目も参照した。また、LGBT に対する施策の調査を行った認定 NPO 法人虹色ダイバーシティ (2021) の調査項目と照らし合わせ、本研究の調査項目の最終版を作成した。第一問は同意を尋ねる項目であり、「本アンケートの回答を同意しますか」である。第二問から第十一問まで、合計 10 問の設問<sup>4)</sup>は本研究の変数として使用する項目である。最後の設問は、「セミナーを受けた後の感想など、自由に書いてください」

という自由記述欄であり、アンケート設問以外のことを伝えられる欄を設けていた。

2022年6月に、授業の一環として90分間のセミナーを一回実施した。「LGBTセミナー」を実施する一週間前に、「LGBTセミナー」の参加は任意であること、参加するか否かは実施した授業の成績と全く関係ないことを説明した上、参加予定の学生に同意の元で事前アンケート<sup>5)</sup>を記入していただいた。「LGBTセミナー」は3つのセクションで構成されており、「性的マイノリティの基礎知識」、「当事者が職場で直面する問題」、「性的マイノリティとの向き合い方」である。「性的マイノリティの基礎知識」には、LGBTのような頭文字語はどのような意味をしているか、性的マイノリティに関する社会の動きの紹介のような内容が含まれている。「当事者が職場で直面する問題」には、日本企業が性的マイノリティ当事者に対する取り組みの種類、当事者が職場で予想される問題のディスカッションといった内容が含まれている。「性的マイノリティとの向き合い方」には、性的マイノリティ当事者と非当事者との間で見られる認識のズレ、性的マイノリティ当事者とどのように接するかといった内容が含まれている。セミナーはクイズやセミナー講師が撮影した動画を用いて、参加型セミナーの形で展開された。また、検証したい説明変数について、セミナーの内容には含まれており、学生のディスカッションテーマとして提示し、学生自身にどのように感じているかをお互いに話し合うことを求めた。「自分がカミングアウトされたらどうなるか」といった討論テーマは例として挙げられる。セミナー後、アンケート記入の有無は参加者に何らの不利益なことは一切ないことを説明した上、任意の元で事後アンケートの記入を促した。合計232名の学生が参加したが、抜け漏れのあるアンケートをすべて欠損値として処理した。最終的に224名の学生から有効なデータを得られ、そのうち218名は1年生であり、6名は2年生である。それにより、本研究は224名の学生のデータを最終有効サンプル数として検定を行った。

#### 4.2. 被説明変数

本研究において、被説明変数は「性的マイノリティに対する総合理解度」であり、アンケート項目の「セミナー後、LGBTを始め、性的マイノリティに関して、どれくらい理解できていますか」を用いる。この項目は5段階評価を採択しており、「1. まだ理解できていない」、「2. 少し理解できた」、「3. ある程度理解できた」、「4. ほとんど理解できた」、「5. 全部理解できた」として処理する。

#### 4.3. 説明変数

本研究が着目した変数は「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」である。「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」は、アンケート項目の「性的マイノリティの当事者との関わる時に不安に感じますか」を用いる。不安程度を問うため、この項目は5段階評価を採択しており、「1. 全く不安に感じない」、「2. 少し不安に感じる」、「3. どちらとも言えない」、「4. あまり不安に感じない」、「5. 非常に不安に感じる」として処理

した。「カミングアウトできる環境の支持」は、アンケート項目の「性的マイノリティの当事者がカミングアウトできる職場環境が必要だと思いますか」を用いる。支持するか否かを問うため、「はい」を1とし、「いいえ」は0とするダミー変数の処理を行う。

#### 4.4. 統制変数

本研究は、アンケートに記載されている他の項目を全て統制変数とする。「性的マイノリティ知識度」、「性的マイノリティの悩みの認知」、「性的マイノリティ当事者の存在への認知」、「性的マイノリティは仲間である認知」、「性的マイノリティが平等扱いされることの期待」、「性的マイノリティへの態度の変化」、「性的マイノリティに関する取り組みの支持度」を用いる。「性的マイノリティ知識度」は、アンケート項目の「性的マイノリティを代表する以下の頭文字の意味を理解しているものを選んでください」を用いる。本項目は合計10個の頭文字で構成されており、「L, G, B, T, Q, I, X, P, A, 2S」である。単語の意味はセミナー中に全て説明しており、セミナー後理解している性的マイノリティを代表する頭文字語の数を知識度の点数とする。「性的マイノリティの悩みの認知」は、アンケート項目の「性的マイノリティの当事者は職場（もしくは所属する組織）でどのような悩みを抱えているかは理解できたか」を用いる。理解できたか否かを問うため、「はい」を1とし、「いいえ」は0とするダミー変数の処理を行う。「性的マイノリティ当事者の存在への認知」は、アンケート項目の「現在所属する組織には当事者がいると思いますか」を用いる。当事者の存在を知っているかといった問いであるため、「いる」もしくは「いない」を1とし、「わからない」を0とするダミー変数の処理を行う。「性的マイノリティは仲間である認知」は、アンケート項目の「性的マイノリティの当事者を職場（もしくは所属する組織）である程度特別扱いされるべきだと思いますか」を用いる。仲間意識があるかを問うため、「いいえ」を1とし、「はい」を0とするダミー変数の処理を行う。「性的マイノリティが平等扱いされることの期待」は、アンケート項目の「性的マイノリティの当事者が今後より働きやすい職場（もしくは所属する組織）になっていくことが期待できると思いますか」を用いる。期待するか否かを問うため、「はい」を1とし、「いいえ」は0とするダミー変数の処理を行う。「性的マイノリティへの態度の変化」は、アンケート項目の「あなたが性的マイノリティの当事者にカミングアウトされるとどうなりますか」を用いる。態度の変化の有無を問うため、「当事者との関わり方が変わる」を1とし、「今まで通り接する」を0とするダミー変数の処理を行う。「性的マイノリティに関する取り組みの支持度」は、アンケート項目の「あなたの職場で性的マイノリティの当事者に対して、取り組むべきものを選んでください」を用いる。計10個の現在日本企業で行われている取り組みが記載されており、選んだ取り組み数を支持する点数とする。仮説1と仮説2においては、階層的重回帰分析と交互作用に関する検定方法を用いて、変数の検証を行なう。仮説1aでは、「性的マイノリティの理解度」を被説明変数とし、「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」を説明変数とする。仮説1bでは、「性的マイノリティの理解度」を被説明変数とし、「カミン

グアウト環境の支持」を説明変数とする。ほかの変数を全て統制変数とする。仮説2では、仮説1aと仮説1bで検定された説明変数を用いて、「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」の交互作用も説明変数とし、検定を行なう。検定に使用する全ての変数の記述統計量は表1となる。

#### 4.5. 分析モデル

仮説1と仮説2は、階層的重回帰分析と交互作用の分析方法を用いて、最終的に4つのモデルが得られた<sup>6)</sup>。まず、被説明変数として、「性的マイノリティに対する総合理解度」を設定し、モデル1では、「性的マイノリティ知識度」、「性的マイノリティの悩みの認知」、「性的マイノリティ当事者の存在への認知」、「性的マイノリティは仲間である認知」、「性的マイノリティが平等扱いされることの期待」、「性的マイノリティへの態度の変化」、「性的マイノリティに関する取り組みの支持度」を統制変数として投入し、「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」を説明変数として投入する。モデル2では、「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」を外し、上述した全ての統制変数と説明変数「カミングアウトできる環境の支持」を投入する。モデル3では、全ての統制変数と注目する「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」をそれぞれ説明変数として投入する。最後に、モデル4では、モデル3に「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」といった交互作用項を投入し、交互作用効果の有無を検証する。その後、交互作用の単純傾斜分析を検証し、交互作用図を作成する。また、交互作用に多重共線性を避けるため、使用する変数はダミー変数を除き、全てセンタリング化済みである。

表1 記述統計量

変数名	平均値	標準偏差
性的マイノリティ知識度	7.183	2.467
性的マイノリティに対する総合理解度	3.031	0.895
性的マイノリティの悩みの認知	0.955	0.207
性的マイノリティ当事者の存在への認知	0.402	0.491
性的マイノリティは仲間である認知	0.592	0.492
性的マイノリティが平等扱いされることの期待	0.884	0.321
カミングアウトできる環境の支持	0.710	0.455
性的マイノリティ当事者と関わる不安度	2.241	1.102
性的マイノリティへの態度の変化	0.290	0.455
性的マイノリティに関する取り組みの支持度	3.170	2.403
サンプルサイズ	224	

## 5. 分析結果

仮説 1a の分析結果として、モデル 3 で「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」は「性的マイノリティに対する総合理解度」に負の影響を与えることが分かり、係数は -0.216 であり、有意確率  $p < .001$  で統計上に有意であった。すなわち、性的マイノリティ当事者と関わる際の不安度が 1 上がるにつれ、性的マイノリティ当事者への総合理解度が 0.216 下がることわかった。仮説 1b の分析結果として、モデル 3 では「カミングアウトできる環境の支持」は「性的マイノリティに対する総合理解度」負の影響を与えることが分かり、係数は -0.002 であるが、有意確率  $p > .05$  で統計上に有意性が見られなかった。仮説 2 の結果はモデル 3 とモデル 4 を用いて説明する。モデル 4 では、「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」と「カミングアウトできる環境の支持」といった交互作用項の係数は正の 0.203 となり、有意確率  $p < .05$  で統計上に有意であった。また、モデル 4 の  $R^2$  (調整済) はモデル 3 の  $R^2$  (調整済)

表 2 性的マイノリティに対する総合理解度予測モデル

	モデル 1	モデル 2	モデル 3	モデル 4
性的マイノリティ知識度	0.099*** (0.024)	0.120*** (0.025)	0.099*** (0.024)	0.108*** (0.024)
性的マイノリティの悩みの認知	0.416 (0.259)	0.367 (0.271)	0.416 (0.260)	0.429* (0.259)
性的マイノリティ当事者の存在への認知	-0.016 (0.110)	0.034 (0.115)	-0.015 (0.111)	-0.012 (0.110)
性的マイノリティは仲間である認知	0.013 (0.117)	0.027 (0.123)	0.013 (0.118)	0.015 (0.118)
性的マイノリティが平等扱いされることの期待	0.181 (0.168)	0.198 (0.177)	0.181 (0.170)	0.162 (0.169)
性的マイノリティへの態度の変化	-0.030 (0.120)	-0.053 (0.125)	-0.030 (0.120)	-0.017 (0.120)
性的マイノリティに関する取り組みの支持度	0.058** (0.025)	0.053** (0.026)	0.058** (0.025)	0.057** (0.025)
性的マイノリティ当事者と関わる不安度	-0.216*** (0.050)		-0.216*** (0.050)	-0.346*** (0.083)
カミングアウトできる環境の支持		0.032 (0.130)	-0.002 (0.125)	0.002 (0.125)
性的マイノリティ当事者と関わる不安度(センタリング済) ×カミングアウトできる環境の必要性				0.203* (0.103)
定数項	-0.550* (0.307)	-0.562* (0.324)	-0.549* (0.311)	-0.551* (0.309)
決定係数 $R^2$	0.242***	0.176***	0.242***	0.256***
n			224	

注：\* < .05, \*\* < .01, \*\*\* < .001, ( ) 内は標準誤差

済)に比べ、0.014増加し、有意確率 $p < .001$ で統計上に有意であった。交互作用項の調整効果が確認できた。モデル3では「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」の係数が-0.216であり、モデル4では、「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」の係数が-0.346であり、有意確率 $p < .001$ で統計上に有意に変化が見られた。モデル3では「カミングアウトできる環境の支持」の係数が-0.002であり、モデル4では、「カミングアウトできる環境の支持」の係数が0.002であり、 $p > .05$ で統計上に有意性が見られなかった。したがって、「カミングアウトできる環境の支持」をする人は、「カミングアウトできる環境の支持」をしない人に比べ、「性的マイノリティ当事者と関わる不安度」が上がるにつれ、「性的マイノリティに対する総理解度」の減少幅がゆるくなると明らかになった。単純傾斜分析を行い、+1SDと-1SDで交互作用図を作成した。単純傾斜分析は表3、交互作用項の結果図は図1となる。したがって、仮説1aで性的マイノリティに対する総理解度に当事者と関わる不安度が負の影響を与えることが明らかになり、仮説が支持された。仮説1bでカミングアウトできる環境の支持の影響は、統計上に有意性が見られなかったため、仮説が棄却された。仮説2では、当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持の交互作用はあり、性的マイノリティに対する総理解度に正の調整効果があると明らかになり、仮説が支持された。

表3 単純傾斜検定結果

	単純傾斜の検定結果							
	カミングアウト必要だと考える場合 (+1SD)				カミングアウト必要ではないと考える場合 (-1SD)			
	係数	標準偏差	t値	p	係数	標準偏差	t値	p
切片	-0.549	0.320	-1.712	0.008	-0.551	0.306	-1.800	0.007
不安度	-0.110	0.074	-1.477	0.141	-0.294	0.064	-4.630	0.000
カミングアウト	0.002	0.125	0.019	0.985	0.002	0.125	0.019	0.985
不安度×カミングアウト	0.203	0.103	1.97	0.050	0.203	0.103	1.97	0.050

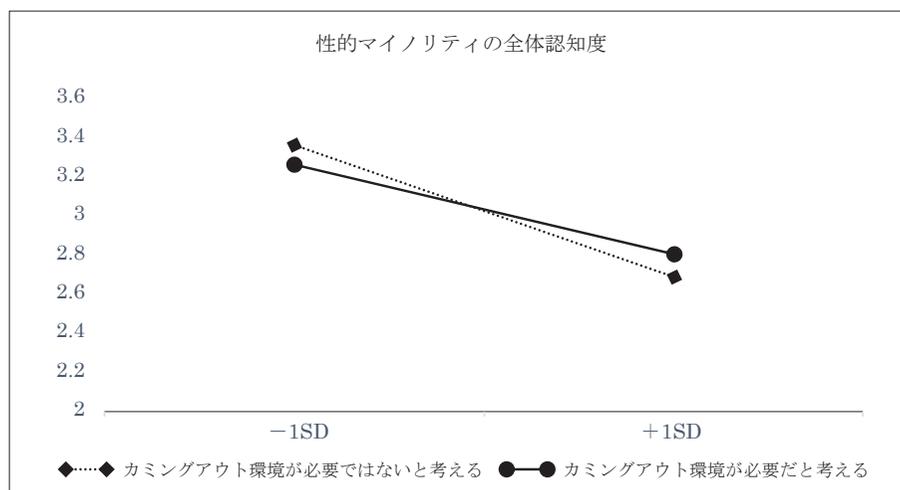


図1 仮説2 交互作用項の結果図

## 6. 結果考察

本研究で得られた結果を踏まえて、「性的マイノリティ当事者と関わる不安の解消」, 「カミングアウトの捉え方」に分けて考察を行った。

### 6.1. 不安度は如何に解消できるか

仮説 1a では、性的マイノリティに対する総理解度のモデル検証結果により、性的マイノリティ当事者と関わる際に、不安度が上がるにつれ、性的マイノリティへの総理解度が下がる結果となった。換言すれば、性的マイノリティ当事者と関わる際に、不安を感じるほど性的マイノリティ当事者への総理解度が低下する。そこで、社会全体の性的マイノリティに対する総理解度を上げるために、当事者と関わる際の不安を如何に解消できるかは重要な側面だと考えられる。仮説 2 では、カミングアウトできる環境を支持する人は支持しない人に比べ、不安度が上がるにつれ、性的マイノリティへの総理解度の低下度合いが緩やかであることが明らかになった。

当事者と関わる不安はほとんどカミングアウト後に現れると考えられるが、カミングアウトという行為は、性的マイノリティ当事者が自分の性的指向、もしくは性自認を他人に伝える行為であり、ある一種の自己開示として捉えられる。それにより、性的マイノリティ当事者のカミングアウトできる環境を支持する人は、性的マイノリティに関する関心が比較的に高いと考えられる。関心が高いと性的マイノリティに関する出来事を調べ、性的マイノリティ当事者を知るようになるという可能性が増える。したがって、性的マイノリティに対する不安を解消するには、性的マイノリティとの接点を増やすことが重要であると示唆される。

本研究で行われているセミナー形式の研修は方法の一種として考えられる。セミナーに含まれる性的マイノリティ当事者の説明といった内容は上述した接点を増やすことにあたる。早期的に学校教育の中で、性的マイノリティに関する内容を取り入れることにより、性的マイノリティに関する総理解度が上がると期待できる。成長過程では、早めに性的マイノリティ当事者を正しく認識すると、当事者と関わる不安も解消できると予想される。Stotzer. (2009) は、性的マイノリティであるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルに対する肯定的な態度が早期的に形成された人は後にカミングアウトをされても、早期的に形成されなかった人に比べ、困惑が少ないことを示した。早期的に肯定的な態度の形成には、早期教育が方法として考えられるため、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルをはじめ、性的マイノリティ全体に対する不安の解消にもつながる。

### 6.2. カミングアウトの捉え方

本研究の仮説 1b では、カミングアウトできる環境の支持は性的マイノリティに対する総合

理解度への影響が統計的に有意ではなかったことが明らかになった。今までの研究やセミナーのような研修で、如何にカミングアウトのできる環境が作れるかは強調されてきたが、今後の取り組みは当事者の立場や視点に変え、カミングアウトなしで居心地の良い組織環境を如何に作れるかに焦点を当て考えるべきである。

性的マイノリティ当事者に比べ、非当事者は職場でのカミングアウトがより必要である、当事者の仕事効率に対してカミングアウトはポジティブな効果を持つと考える傾向があると閻(2021)は指摘した。現在の日本社会において、学校もしくは職場でのカミングアウトはまだハードルが高く、性的マイノリティ当事者からすると、カミングアウトのメリットが極めて少ないため、カミングアウトを好んですることを考えにくい。カミングアウトできる環境が性的マイノリティに対する総理解度と関係が見られなかったことにより、性的マイノリティ当事者にカミングアウトを要求するより、如何にカミングアウトせず働きやすい、もしくは通いややすい職場と学校を提供していけるかを今後の取り組みポイントになるかと思われる。

一方、カミングアウトできる環境が必要だと考える人は必要ではないと考える人より、性的マイノリティ当事者と関わる不安度の上昇につれ、性的マイノリティに対する総理解度の下がり具合は緩やかであるため、性的マイノリティ当事者との信頼関係を如何に構築していけるかも今後の取り組み内容として考えられる。不本意のカミングアウトではなく、性的マイノリティ当事者がカミングアウトしたい時に、カミングアウトができれば、社会全体は性的マイノリティへの総理解はまた上がると期待できる。

## 7. 本研究の限界

本研究は、性的マイノリティに対する総理解度に影響する要因を分析したが、研究の限界点を2点挙げておきたい。1点目として、サンプルに性的マイノリティ当事者の割合が不明確である。仮説を検証するために、シスジェンダーである異性愛者を対象とした内容がメインとなり、当事者向けの内容ではないとも解釈できる。したがって、アンケートの自由記述に「ストレートによるストレート向けの内容だと思う」といった記述があり、性的マイノリティ当事者からすると、違和感が生じてしまう。当事者の割合を把握せず、セミナーの受講生は同じ属性とみなしていることは本研究の限界点として考えられる。

2点目として、被説明変数を計るため、「どれくらい理解できていますか」という質問を設けられたが、回答する基準にバラツキが存在することである。回答者は受講する前から性的マイノリティを知っているか、周りに性的マイノリティ当事者が存在しているかなどにより、回答する基準が変わってくると思われる。それにより、同じ状況下で得られた回答になっているかが懸念される。今後、アンケートの回答の基準を揃えるため、回答例を設ける、もしくはより具体的な評価方法を提示することにより、回答の精度を上げる必要がある。

## 8. おわりに

上述した結果を踏まえて、本研究の結論を述べる。性的マイノリティ総理解度に影響する要因とは何か、要因間に相互作用があるかを明らかにすることを目的とし、A大学の学生に向けLGBTセミナーを行い、データの回収を行った。セミナーを受講した後、学生の性的マイノリティ当事者への総理解度に影響を与える要因を分析するため、「当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持は、それぞれ性的マイノリティに対する総理解度に負の影響を与える」といった仮説1aと仮説1bを立て、結果として当事者と関わる不安度の負の影響が見られたが、カミングアウトできる環境の支持が見られなかった。仮説1aは支持され、仮説1bは棄却された。また、「当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持の交互作用はあり、性的マイノリティに対する総理解度に正の調整効果がある」という仮説2を用いて、変数間の交互作用を検証した。その結果、当事者と関わる不安度とカミングアウトできる環境の支持の交互作用は正の効果が確認され、交互作用項は正の調整効果があるとも明らかになった。今後セミナーのコンテンツを提供する際に、不安度の解消とカミングアウトの捉え方は性的マイノリティの総理解度を上げる際、重点的に着目するポイントとして考えられる。

本研究は、大学生が性的マイノリティに対する総理解度に影響を与える要因の分析を行ったが、実施する場所や対象の属性により、まだ「オンライン研修での検証」と「異なる学級の大学生間での比較」といった課題が残されている。

### 「オンライン研修での検証」

本研究の仮説を検証するためセミナーを開いた。だが、2020年から全世界に広まった新型コロナウイルスにより、対面式の研究が実施しにくいことに直面している。それにより、オンラインでの研修や対面とオンラインの両方を用いたハイブリッド式の研修が近年注目を浴びている。実際に、オンラインでの授業はどのようなメリットがあるかに関する研究結果により、「移動時間の削減」、「受講場所の自由化」などといったメリットを植村ら(2020)は挙げた。また、後藤・小柳(2021)は、オンライン授業での双方向の参加型にフォーカスした研究をし、「従来の教授行動が変容する」ということの重要性について言及した。勉強する側だけではなく、教える側も新しいスタイルに備えて、デバイスとソフトウェアに関する知識や技能を得ることにより、オンライン授業や研修がよりスムーズになると予想される。LGBTセミナーをオンラインで実施し、オンラインでのセミナー効果はどのようになっているか、対面セミナーと効果に異なるかを明らかにしていくことが今後の研究課題として考えられる。

### 「異なる学級の大学生間での比較」

本研究で取得したデータは大学一年生が中心となる授業で得られたものであり、大学生を全面的に網羅したものと言い難い。大学一年生は高校を卒業して社会経験が比較的少ないため、物事の認識や行動は、まだ高校時代で形成された判断基準によるものであり、大学での社会経験によるものがほとんど含まれていないと懸念される。実際、大学三年生もしくは四年生は大学生活を経て、より多くの経験を有しているため、大学学級による違いが多くの研究では明らかになった。近藤（2022）は、大学生の時間不安に関する調査を行い、時間不安に影響を与える評価不安が学級間での差異を発見した。また、松中・大重（2022）は、看護大学の学生の睡眠工夫を学級間で比較し、大学二年生の学生の睡眠質が最も悪く、専門科目の履修が多くなったという外部要因があると明らかにした。このように、学級間では学生が直面する問題点が異なり、勉強するスキルや履修環境などといった内外要因による相違点が予想され、性的マイノリティに対する認識も異なる可能性がある。今後異なる学級の大学生間で、性的マイノリティの総合理解度の比較は研究課題として考えられる。

### 謝辞

本研究にご協力くださったA大学の学生の皆様に深謝の意を表します。また、本研究の執筆にあたって、高松里江教授には適切なお指導を賜りまして、感謝申し上げます。

### 【注】

- 1) 性的マイノリティ当事者ではないが、支援する人のことを指す。
- 2) 本研究では、性的マイノリティはセクシュアルマイノリティと同じ意味合いを持つとするため、性的マイノリティに統一する。
- 3) 法務省ホームページ (<https://www.moj.go.jp/content/001382834.pdf>) 最終アクセス日 2022年12月26日
- 4) 参考資料にて確認ができる。
- 5) 本来、セミナーによる同じ項目の変化があるかを測定する予定だったが、複数測定不可な変数により、最終的に事前アンケートを使用しないことにした。
- 6) 表2にて確認できる。

### 【参考文献】

- (c) 特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ, 国際基督教大学ジェンダー研究センター 2020 <https://nijirodiversity.jp/nijivoice2019/> 最終アクセス 2022年10月29日.
- Cooper, M.B., Chacko, M., & Christner, J. (2018). Incorporating LGBT health in an undergraduate medical education curriculum through the construct of social determinants of health. *MedEdPORTAL*, 14, 10781.
- Kull, R.M., Kosciw, J.G., & Greytak, E.A. (2017). Preparing school counselors to support LGBT youth: The roles of graduate education and professional development. *Professional School Counseling*, 20(1a), 1096-2409.
- Matza, A.R., Sloan, C.A., Kauth, M.R., & DeBakey, M.E. (2015). Quality LGBT health education: A review of key reports and webinars. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 22(2), 127.

- Pastrana, A.J. (2015). Being out to others: The relative importance of family support, identity and religion for LGBT Latina/os. *Latino Studies*, 13(1), 88-112.
- Sharek, D.B., McCann, E., Sheerin, F., Glacken, M., & Higgins, A. (2015). Older LGBT people's experiences and concerns with healthcare professionals and services in Ireland. *International journal of older people nursing*, 10(3), 230-240.
- Stotzer, R.L. (2009). Straight Ally: Supportive Attitudes Toward Lesbians, Gay Men, and Bisexuals in College Sample. *Sex roles*, 60, pp.67-80.
- Tagawa, M. (2018). Coming out to parents in Japan: A sociocultural analysis of lived experiences. *Sexuality & Culture*, 22(2), 497-520.
- 植村八潮・山崎航・小田佳織・長谷川さくら (2020) 「教員・学生へのアンケートによるオンライン授業の現状分析」『専修大学情報科学研究所所報』96, pp.21-30.
- 宇田乃絵・五位塚和也 (2022) 「トランスジェンダー当事者における性別違和への気づきからカミングアウトを行うプロセスの検討：複線径路・等至性モデルによる FtM を自認する当事者の語りの分析」『大阪大谷大学教育学部特別支援教育実践研究センター紀要』6, pp.3-19.
- 梅本貴豊・稲垣勉 (2021) 「授業中の学習における状況的動機づけレベルと変動性の交互作用効果」『関西大学高等教育研究』12, pp.87-98.
- 閻亜光 (2021) 「ダイバーシティマネジメントに基づく日本企業における LGBT の施策と展望～SCAT 分析を用いた日本の LGBT 先進企業の事例より～」15, pp.27-58.
- 閻亜光 (2021) 「職場で行われる LGBT 施策に対する認識ズレ及び職場環境分析：LGBT 当事者と非当事者男女との比較を用いて」『社会システム研究』43, pp.131-180.
- 大西孝志 (2022) 「多様性に関する現状と課題～2021 五輪東京大会とドラマ等における多様性～」『東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究年報』14, pp.49-63.
- 近藤敏允 (2022) 「大学生における学年間の比較を通じた時間不安の差が生じる原因の検討」『日本教育工学会研究報告集』2022 (2), pp.212-217.
- 葛西真記子・小渡唯奈 (2018) 「性の多様性を認める態度」を促進する要因：セクシュアルマジョリティへのインタビュー調査」『鳴門教育大学研究紀要』33, pp.50-59.
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 (2016) 『性的マイノリティについての意識—2015 年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ
- 河野美江 (2018) 「島根大学における LGBT の学生に対する支援—ダイバーシティの観点から—」『Campus health 公益社団法人全国大学保健管理協会機関誌』55 (2), pp.94-99.
- 金智慧 (2022) 「高等教育機関における性的マイノリティ当事者学生の困難と対処」『人間科学研究』35 (2), pp.377-379.
- 小畑文也・勝夏織・合田樺恋・山本智美 (2022) 「大学のセクシュアルマイノリティに関わるガイドラインの概要と問題点：テキストマイニングによる分析」『山梨障害児教育学研究紀要』16, pp.65-72.
- 鈴木文子・池上知子 (2020) 「カミングアウトによる態度変容」『心理学研究』91 (4), pp.235-245.
- 田中みどり・今城周造 (2021) 「性的マイノリティの自己受容とカミングアウトの関連性の検討」『昭和女子大学生生活心理研究所紀要』23, pp.59-74.
- 電通 (2021) 「電通、「LGBTQ + 調査 2020」を実施」<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2021/0408-010364.html> (最終アクセス日 2022 年 7 月 27 日)
- 中山俊昭 (2021) 「大学生の意識調査からみえるセクシャルマイノリティ教育について」『大和大学研究紀要』7, pp.73-82
- 服部英治 (2021) 「医療・介護経営者のための人事・労務入門：履歴書で女性と思って面接したら男性だった！トランスジェンダーの雇用に不安」『日経ヘルスケア医療・介護の経営情報』(382), pp.86-89.
- 法務省 (2015) 「あなたがあなたらしく生きるために性的マイノリティと人権」<https://www.moj.go.jp/content/001382834.pdf> 最終アクセス日 2022 年 12 月 26 日
- 松井めぐみ (2021) 「海外の大学におけるセクシュアルマイノリティ学生支援—ウェブサイトから分かるアメリカの大学の支援状況—」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』6, pp.136-147.
- 松中枝理子・大重育美 (2022) 「看護学生の睡眠の学年間比較と睡眠を確保するための工夫」『日本赤十字九州国際看護大学紀要』20, pp.1-8.

- 南泰代（2021）「学生と社会における LGBT の意識」『2021 年度 情報処理学会関西支部 支部大会 講演論文集』2021.
- 宮腰辰男（2020）「日本学生相談学会における LGBTQ の学生に対する取り組みの現状：学会誌「学生相談研究」の分析を中心に」『一橋大学学生相談室年報』Vol. (2), pp.20-29.
- 吉澤真歩・近藤浩子・井田伸人（2021）「LGBT に対する看護系大学生の理解に関する調査」『北関東医学』1 (1), pp.37-46.
- 吉岡真梨子・坂谷佳祐（2017）「教員養成課程学生の性的マイノリティに関する知識量及び正答確信度を規定する要因の検討」『学習開発学研究』10, pp.157-164.
- 吉本圭佑（2022）「性のあり方の多様性に関する龍谷大学生・教職員の意識調査報告」『龍谷政策学論集』11 (1/2), pp.59-77.
- 四元正弘・千羽ひとみ（2017）『ダイバーシティとマーケティング：LGBT の事例から理解する新しい企業戦略』東京：宣伝会議

#### 【参考資料】

1. このアンケートに協力しますか
  - はい
  - いいえ
2. 性的マイノリティを代表する以下の頭文字の意味を理解しているものを選んでください  
L, G, B, T, Q, I, X, P, A, 2S
3. セミナー後、LGBT を始め、性的マイノリティに関して、どれくらい理解できていますか
  - まだ理解できていない
  - 少し理解できた
  - ある程度理解できた
  - ほとんど理解できた
  - 全部理解できた
4. 性的マイノリティの当事者は職場（もしくは所属する組織）でどのような悩みを抱えているかは理解できたか
  - はい
  - いいえ
5. 現在所属する組織には当事者がいると思いますか
  - いると思う
  - いないと思う
  - わからない
6. 性的マイノリティの当事者を職場（もしくは所属する組織）である程度特別扱いされるべきだと思いますか
  - はい
  - いいえ

7. 性的マイノリティの当事者が今後より働きやすい職場（もしくは所属する組織）になっていくことが期待できると思いますか
- はい
  - いいえ
8. 性的マイノリティの当事者がカミングアウトできる職場環境が必要だと思いますか
- はい
  - いいえ
9. 性的マイノリティの当事者との関わる時に不安に感じますか
- 非常に不安に感じる
  - 少し不安に感じる
  - どちらとも言えない
  - あまり不安に感じない
  - 全く不安に感じない
10. あなたが性的マイノリティの当事者にカミングアウトされるとどうなりますか
- 今まで通りに接する
  - 当事者との関わり方が変わる
11. あなたの職場で性的マイノリティの当事者に対して、取り組むべきものを選んでください
- ① 経営層の支援宣言および差別禁止の明言化
  - ② 同性パートナーシップ制度の導入および運用
  - ③ 相談窓口の設置
  - ④ 支援者（アライ）による職場内の運営
  - ⑤ トランスジェンダーへのサポート 例：性別適合手術の特別休暇
  - ⑥ 当事者の人脈を広げるためのネットワーク
  - ⑦ ステッカーなどの啓発グッズ
  - ⑧ LGBTに関する研修を含めた啓発イベント 例：LGBTの映画を観賞会
  - ⑨ LGBT市場向けのサービスの提供 例：同性婚の挙式場
  - ⑩ 変に当事者を特別扱いしない
12. セミナーを受けた後の感想など、自由に書いてください

## **Influencing Factors and Interaction Analysis of Perceptions of Sexual Minorities**

～ A study of college students who attended an LGBT seminar ～

**Yan Yaguang\***

### **Abstract:**

This study focused on college students' overall understanding of sexual minorities and determined whether two factors, such as “the level of anxiety about being involved with the sexual minority” and “supportive environment for coming out”, influenced their overall understanding of sexual minorities. Then it was examined whether there was an interaction between the two factors. A voluntary LGBT seminar for university students was held at University A in Japan, and a questionnaire administered with the consent of the students who attended the seminar was used as the data for this study. The questionnaire conducted of a total of 12 questions, and finally 224 valid samples were obtained. To analyze the factors that influence the overall level of understanding of sexual minorities after the seminar, Hypothesis 1a: “The level of anxiety about being involved with sexual minority will negatively influence the overall level of understanding of sexual minorities” and Hypothesis 1b: “Support for an environment in which people can come out will negatively influence the overall level of understanding of sexual minorities”. The results showed that “the level of anxiety about being involved with the sexual minority” had a negative influence on the overall understanding of sexual minorities. Hypothesis 1a was supported, as there was a statistically significant on the “the level of anxiety about being involved with the sexual minority”. Hypothesis 1b was rejected because the negative influence of “supportive environment for coming out” was not statistically significant. Hypothesis 2: There is an interaction between “the level of anxiety about being involved with the sexual minority” and “supportive environment for coming out”, and there is a positive adjustment influence on overall understanding of sexual minorities, was used to analyze the interaction influence between the variables “the level of anxiety about being involved with the sexual minority” and “supportive environment for coming out” on overall understanding of sexual minorities. The results showed that the interaction influence between the variables of “the level of anxiety about being involved with the sexual minority” and “supportive environment for coming out” on the overall understanding of sexual minorities was analyzed. The results revealed that there was a positive influence of the interaction between “the level of anxiety about being involved with the sexual minority” and “supportive

environment for coming out” on the overall level of understanding of sexual minorities. Based on the obtained results, the new findings were that how to erase anxiety when interacting with sexual minorities and how to handle coming out are important aspects when raising the overall understanding of sexual minorities. In addition, online seminars have become mainstream recently, future research questions remain to be addressed in conducting LGBT seminars, such as whether online LGBT seminars differ effectively from face-to-face seminars, and whether differences in LGBT seminars exist among different grades of college students.

**Keywords:**

LGBT seminars, sexual minorities, coming-out, interaction.